

新入生歓迎「オンライン茶話会」(7月8日)

文窓会主催・恒例の新入生歓迎ティーパーティーがリモートで

文学部の新入生は、1年生の後期に進むべき専修を決定し、2年生からそれぞれの専修に所属します。この茶話会（新入生歓迎ティーパーティー）は、哲学・文学・史学・知識システム・社会文化の5学科目・15専修の学びについて、新入生たちがより具体的なイメージを描いて選択できるようにとの願いから始まった、先生と新入生の交流の場です。今年は新入生のケアの一環として「顔を見ながら」話をする機会を持つという先生方の思いもあり、オンラインでの実施となりました。



2部構成で開催

参加者は第1部開催時は87名で、教員は20名ほど、学生は65名ほど。先生方が砕けた雰囲気話しかけてくださり、終始和やかな雰囲気に。第2部は各専修に分かれ、学生たちからも様々な質問があり、なかなか興味深い内容の応酬が交わされました。オブザーバーで参加した文窓会・武藤会長も「ちょっとだけ覗いて退出しようと思っていたのですが、ついつい最後の17時45分まで付き合っていました」と感想コメント。オンラインでもコミュニケーションが持てる、まさに「ニュー・ノーマル」時代!でも、来年はやっぱり対面で新入生歓迎ティーパーティーが開かれることを祈っています!

KOJSP 神戸オックスフォード日本学プログラム8期生 演習発表会(8月3日)

12名のオックスフォード大学東洋学部日本語専攻の2年生が、1年間の演習の成果をZOOMの画面で発表。その後、引き続いて修了式が開催され、奥村文学部長、武田神戸大学長と並んで、武藤文窓会会長からも労いと祝福のスピーチが送られました。



文窓

ふみのまど

神戸大学文学部 同窓会 文窓会

事務局: 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

☎ & FAX (078) 806-7207

(月、水曜日の午後3時以降)

<http://www.kobe-u.biz/bunsokai>

文学部: ☎ (078) 803-5595 FAX 078-803-5589

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp>

18号
2020.9.30



1987年11月 永積安明先生(中世文学)ご夫妻 住吉の島田先生を見舞う 左から、島田先生、永積先生ご夫妻、島田すみ子夫人 撮影: 永田 良さん



島田勇雄先生(国語学)ご夫妻



池上 洵一名誉教授、学部4年生の学生証(御影時代)

新型コロナウイルス感染症で被害に遭われた全国の同窓生の皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、感染拡大防止にご尽力されている皆様には深く感謝申し上げます。

特集 / 文学部 70 周年の
語り手たちに、再び





昨年度・70周年 事業とその後

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長 奥村 弘

卒業生の皆様、新型コロナウイルス感染症の大流行の中、お元気でしょうか。文学部も大きな影響を受けています。教職員一同、ひとりひとりの学生の学びを止めないとの方針の下、努力を続けておりますが、対応に苦慮しているところです。

卒業式と文窓会主催の卒業記念パーティーは行えず、4月、文学部のキャンパスで新入生を迎えることも出来ませんでした。同窓会にお世話をいただいている新入生茶話会も、リモートでの開催となりました。6月末現在、学生の皆さんは構内に基本的に入れず、授業も遠隔授業で行われています。特に新1年生は一度も大学に来ることが出来ず、サークル活動等も停止するなど厳しい状況が続いています。

幸い、創立70年事業はなんとか開催することができました。10月のホームカミングデイには、沢山の卒業生の方々に集まっていただき、文学部の歴史を振り返ることが出来ました。私も再度、総合大学が文学部を

持つことの重要性を認識させられました。また70周年記念キックオフシンポの成果として、神戸大学出版会から『マンガ／漫画／MANGA ー人文学の視点から』を刊行いたしました。国際的な共同研究も着実に進展しており、ブリュッセルで開催した文化遺産シンポジウムは本研究科を中心とした国際共同研究へと発展しています。また7月の北京外国語大学、11月の北京大学、復旦大学との国際シンポジウムも大きな成果をおさめました。それぞれ今年度も開催を予定していたのですが、残念ながら中止せざるを得ない状況です。

神戸新聞紙上での一面全体を使った大型寄稿「21世紀の人文学ー危機の時代を共に生きるために」も好評を得て、9回を数えています。神戸新聞ホームページのエッセー・評論欄でも読むことが出来ますので、ご意見、ご感想をお寄せ下さい。私たちが連載で掲げたテーマは、新型コロナウイルス流行下で、ますます重要性を増しています。今年度は、研究の成果を学生教育や社会との連携につなげていきたいと考えています。

教育研究を支えるために今年度も「神戸大学文学部・大学院人文学研究科創立70周年記念事業募金」を進めています。昨年度、多くの卒業生の皆様から御寄付をいただき感謝しております。引き続き、ご支援ご協力のほど、よろしくお願いします。

とを書き残してほしいものです。自宅待機の続く中、骨のある多くの作品の応募を期待して良いでしょう。

第1部は増記先生の進行で進められ、教員の方が順に画面から自己紹介。教壇では見ることでできない先生方の姿やお話に和やかな雰囲気が始まりました。

第2部は学生の専修訪問、学生は自由に専修の門を叩き先生に質問し話を聞くことができます。私は新入生の印象をつかみたいと思い、15に分かれた各専修を覗きました。

そこで新しい2つのことを経験しました。1つはまだ神戸に居を構えていない実家からの参加。2つ目は入院先からの参加です。このようにオンラインでは大学に出てくることなく、ネット環境が整っていれば、どこにいても授業や行事に参加できることを改めて実感しました。米国では9月の新学期からは全面遠隔授業でおこなう大学も多いといえます。日本でも授業の1つの方法として考えられていくことでしょう。しかし、やはり先生と学生が対峙して指導を受け研究を進めていくのが一番。お互いの熱が伝わり新しいことが芽生えてくる。それが教育だと思うのですが。

去年は文学部創立70周年ということでホームカミングデイで各年代の同窓生に「自分の学生時代と大学の様子」を語ってもらいました。残しておきたいお話ばかりでしたので、今号に寄稿していただきました。もう一度文学部の70年とご自分の大学生生活を振り返ってみてください。コロナ感染症が1日も早く収束し、学生初め同窓生が大学をいつでも訪れる状態になることを願っています。そして皆様のご健勝を心からお祈りしております。



新入生歓迎 ライン茶話会

文窓会会長
武藤 美也子

皆様いかがお過ごしでしょうか。今年はコロナ感染症の流行で日本初の緊急事態宣言が全国に出され、今まで経験のない自粛生活を余儀なくされました。宣言は解除されましたが第2波第3波と予断を許さない状況で、不自由な生活を強いられていらっしゃることでしょう。

この原稿を書いている7月初めには、未だ学生は大学へ入ることを許されず遠隔授業が続いております。卒業式も入学式も中止になり、文窓会が主催する卒業祝賀パーティーも新入生の歓迎ティーパーティーも行われませんでした。卒業生にはせめてものお祝いと図書カードを贈りました。新入生には7月8日のライン茶話会でようやく同窓会の紹介ができました。皆さんもご存知のZoomを使ったライン茶話会は初めての試みで、その様子をご報告します。

2部に分かれており第1部は「歓迎セレモニー」、第2部は各専修訪問です。第1部で文学部長に続き文窓会会長として、新入生にラインではありますが顔を出して挨拶ができました。文窓会の説明と対面で歓迎ティーパーティーが開けなかったことの無念を話し、自宅にいても参加できる「文窓賞」への応募を勧めました。今年は異常事態を受け応募締切日を9月8日に延期しました。今回遭遇したパンデミックの中で、考えたこ

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第14回 文窓賞 2020年 学生レポートコンクール結果発表

新型コロナウイルスによるパンデミック、大学で講義を受け、友人たちと語らうことの出来ない状態が続きました。その状況下で、「文窓賞」学生レポートコンクールに、うれしいことに、14作品の応募がありました。審査の結果、受賞作として、下記作品が選ばれました。

■ 優秀賞（賞金5万円）

「旅の途中の文学部」

薄 まなみ(1回生)

浪人中の上海への2度目の旅で、中国の歴史への興味を確認した。歴史を学ぶのは、現在&未来に活かすためと作者は考え、視野を広げるため、これから始まる大学で言語の習得や留学を目指す。閉塞的な現状においても、客観的にポジティブに考える。長い人生の旅で、いろんなものと遭遇しながら成長していく予感がする。タイトルも良く、若者らしい作品だ。

佳 作（賞金1万円）

「4年半の不条理」 井野 成実(哲学専修4回生)

文学の役割は、社会ではタブーとされている不条理をもうまく料理して読ませることだと言う。作者は、飾りをつけず(否、少々偽悪的かもしれない)、アイロニーを交え、自分の家族や環境を描く。卒業する時に突き付けられたのは、成長ではなく未熟さだったと厳しく自分を見つめる。作者が、不条理を受け入れつつ、今後、如何に成長していくのか興味をもたせる。

「2020年、文章と関わる」 伊藤 和音(1回生)

オンライン授業の日々、失い続けるコミュニケーションや会話の重要性があらためて認識される。文章、そして、SNSやLINEは会話と同等のコミュニケーションツールになりうるのか？ 文章は交換能力がないが、SNSは「思いやり」があればツールになり得ると語る。良い作品に触れ、繊細な表現力を鍛え、SNS上だけでなく、本来の文章そのものの力を発揮して文学作品の創作にも挑んで欲しい。

新人賞（賞金1万円）

「不器用な世界」 米谷 実紗(1回生)

選考を終えて

今年の応募は4回生と1回生のみであった。大学最後の年を迎えた4回生、入学したが一度も大学に足を踏み入れていない1回生、いちばん影響を受けた両回生だろう。応募作品は、自分を見つめ、内なる模索や葛藤を綴った作品が多かった。コロナ禍における閉塞感が伝わってくる。このような時期に、自分を見つめることは、長い人生の中で、貴重な機会だと思う。

しかし、歴史的な大惨事の真只中、このパンデミックを如何に考えるのか？ 歴史や文学、哲学等を学ぶ(これから学ぶ)文学部生として、過去を顧み、将来に思いを巡らせ、想像力を駆使して、いろんな観点から描かれたレポートも期待した。出会えなかったのは残念だ。毎年書き続けることで自分を知り、思いがけない発見もある。来年以降も是非書き続けてほしい。(文責 審査委員長 西川京子)

選考委員

奥村弘研究科長(日本史学教授) 長坂一郎副研究科長(心理学教授) 樋口大祐副研究科長(国文学教授) 武藤美也子 日高健一 三宅征彦 田中賢司 廣野幸夫 吉田浩次 坂本直樹 中畑寛之 津田薫 西川京子

特集

文学部 70 周年の語り手たちに、再び

あいにく中止となった今年のホームカミングデイ（HCD）に替わる特別企画として、
 昨年の HCD「卒業生によるスピーチ」にご登壇いただいた 7 名の同窓生と、
 ご講演くださった池上洵一（国文学）・眞方忠道（哲学）お二人の名誉教授にご寄稿いただきました。



当日の司会を担当して

市澤 哲教授（日本史学）

これまでのホームカミングデイの行事と言えば講演が定番でしたが、今回は鈴木義和先生の発案でさまざまな世代の卒業生と退職された先生によるスピーチをリレー形式で行うことになりました。私は鈴木先生（先輩）に命じられて司会を務めさせていただきました。

事情がよくわからないまま当日を迎えたのですが、終戦直後の文学部発足時の思い出に始まり、大学紛争、そして自分と同年代、阪神淡路大震災、そして現在へと話がまさにリレーのようにつながり、飽きることが全くありませんでした。10年刻みでスピーカーが立ってもよかったと思うほどでした。

考えてみれば、自分とは違う世代の経験を聞き、それを共有する機会があるのも、同窓会の意味なのでしょう。同時に、時代や環境が違って、文学部での学問を志した点ではみな共有するところがあるわけで、時代を超えて私たちが何に価値を見出そうとしているかを問うことにもなる、周年行事にふさわしい有意義な企画だったと思いました。

とりわけ大学紛争時については、学生の立場、教員の双方の立場からのスピーチがあり、かの「ハノイ対談」を想起してしまいました。ハノイ対談とは、ヴェ

トナム戦争を指導した一人であるロバート・マクナマラが、ベトナム側の戦争指導者と1997年にハノイで行った会談のことです。マクナマラの意図や会議の記録は『果てしなき論争』（共同通信社）という本にまとめられています。ちなみにタイトルは「歴史とは果てしなき論争である」という箴言からとられています。自己中心的な思い上がりや、相手に対する理解の欠如、交渉の軽視が悲劇を生んだことなど、今以て（否、他人を平気で馬鹿呼ばわりすることが横溢している今だからこそ、と言うべきか）含蓄に富んだ対談です。

スピーチとハノイ会談を行き来しつつ私が思い出したのは、当事者たちが1つの出来事について、違う立場、角度から語りあうことの意味です。私は歴史を専攻していますが、しばしば結果から逆算して歴史の過程を描いているのではないかというむなしさを感じることがあります。1つの事象を複数の観点から検証することができれば、何がどのように起こったのかについてよりよく知ることができるだけでなく、自分たちの視野の限界や失われた可能性、そしてありえた未来について知ることもできます。

今回のスピーチを含め、学生と教員はもちろん敵同士ではありませんが、同じ時代を違う視点から論じ合ったとき、何が浮かび上がってくるのか興味は尽きません。鈴木先生のアイデアをさらに発展させた、次の企画を期待する次第です。

10代の「彼」と暮らした日々

永田 良（5回生・国語国文学専攻・1957年卒）

文学部が古希を経た。私は10代のころの「彼」と2年半一緒に暮らした。そして私は今85歳。私が「彼」のもとを巣立つ時、どこかに見えないタイムカプセルを埋めてきた。ある日「文窓会」の武藤会長が、「カプセル掘り出して私たちにも見せてくださいよ」と言った。語り部じゃないけれど、10代のころの「彼」の息遣いを伝えるのも悪くないな、と思いだした。私個人のカプセルだから、視野に偏りがあるだろうが、そこは目に見てほしい。

昭和24年、文理学部文科として始まり、29年独り立ちして文学部となった。私は前年の昭和28年に文科の学生として自宅から御影学舎に通い始めた。コンクリートの柱が2本殺風景に立っているだけの門を入ると、今なら優雅な前庭などがあるべきところに、おそらく駐留米軍の払い下げだろうかカマボコ状の薄汚れたトタン張りの小屋が2棟並んでいた。

御影学舎には文理学部と教養課程御影分校が同居していたから学生数はかなり多かったはずだが、それに見合う空間や施設設備などまるでなかった。男子学生はほぼ全員詰襟服で、多くは角帽を着用していた。当時角帽は大学生のステイタスシンボルであった。

教養課程（ジュニア）から専門課程（シニア）に上がる際、文学部生は、何科に行こうか何を専攻しようかと思案する。発足当初、多くの学生が希望したのは、哲学科の社会学専攻と文学科の英米文学専攻であった。ちなみに昭和26年まで文学科には英米文学専攻しかなかった。昭和27年、文学科に国語国文学専攻が設置されたので、私はそこへ行った。国語国文学専攻（以後国文科と表記）は、3年遅れで始まったので、厳密に言うと私は大学では5回生だが国文科では3回生ということになる。

国文科の先輩方、すなわち3回生、4回生が実質国文科のカラーを作り上げてこられたことは間違いない。彼・彼女たちが草創期の戦力であった。国文科ができた、というので、他学部・他学科（例えば工学部、経済学部など）から移ってこられた方もいた。ある3回生から、初めて神戸の地を踏むことになった教官を駅頭までお出迎えに行った、という話を聞いた時には、草創期の熱い空気に直に触れた思いだった。

幸い私が進級した3年目の国文科には、中世文学の永積安明、近代文学の猪野謙二、国語学の島田勇雄と各泰斗が揃っておられたから、さすがにお出迎えまではなかったが、転居のお手伝い、住民登録の代行などは当たり前に行っていた。手狭な公務員宿舎に積み上げられた書籍の山を呆然と見詰めていたことを思い出す。国文科の3教官はいずれも東大文学部のご出身で、神戸は全く縁のない任地だっ

たのだが、すぐに風土にも馴染んで下さり、我々学生とも本当に親しく接して下さいました。教官と学生たちとの距離が近い伝統は、当初からあり、今に至っていると思う。

私は卒論に中世文学を扱ったこともあって、永積先生にはことさらにまごまごご指導いただいた。しかし生来なまぬるい私のこと、先生のご厚恩に報いるまでに至らず終わったことを今も申し訳なく思っている。先生が琉球大学招聘教授として沖縄（返還前）に行かれた時、私の子供たちへのおみやげとして、珍しい貝殻のセットを頂戴した。そのうちの幾つかが今も私の手元にある。

猪野先生は、皇国史観色が強かった国文研究に一石を投ずるかたちで設立された日本文学協会（日文協）に所属して活動しておられた。その影響で国文科の学生の何人かは日文協の会員となった。御影学舎の近くの蕎麦屋「天治」の2階に陣取って、甲論乙駁、熱い時間を持ったこともあった。

学舎の一番近くに居を構えておられた島田先生宅は、さながら国文科生の「くつろぎどころ」の感を呈していた。ご多分に漏れず、2階に続く階段にはぎっしり書籍が積み上げられていて、昇るも下るも難儀した。島田先生は神戸で結婚され、生涯をこの地で過ごされた。先生が他界されたあと、勇雄を「ゆうゆう」と読み替えて、毎年2月に「ゆうゆう忌」が催され、のちに「ゆうゆう会」と名こそ変わったが前後20数年間続いた。さながら国文科同窓会という位置づけだった。すみ子夫人も欠かさず出席された。

今でも行われているであろうか、私の在学中よく「集中講義」があった。他大学の教授が神戸大の学生に何時間か連続で講義をする、というあれである。これはすこぶる刺激的でかつ魅力的であった。例えば「時枝文法」で脚光を浴びていた東大の時枝誠記教授が来られた時など、教室は満席、窓を全開して廊下から受講する姿もあった。

昭和32年3月、私は「文学士と称することを許す」みたいな紙片を貰って御影学舎を後にした。20代後半から「彼」は六甲台に居を構え、70代の今もそこからかつて暮らした御影の辺りを眺める日々を送っている。そして80代、100代と年輪を重ね続けるであろう、きっと。

（表紙に、永田氏にご提供いただいた当時の先生方の写真を掲載しています）



1953年4月 永田 良さん入学

物干し竿と卓球台

西田 裕 (18回生・哲学科社会学専修・1970年卒)

今振り返ってみれば、1947年生まれで団塊世代のフロントランナーとしての一生でなかったかと思う。高校では数学の先生から「この問題が解けると、全国250万人中10万番上がる」とよく言われていた。そうした中で学んだ当時の文学部生活の思い出というか回想を記してみたい。

1967年10月教養課程から学部に進んだ時には、社会学は堀喜望、金澤實、杉之原寿一の三教授、長谷川善計助教授、大野道邦助手の体制であった。

2019年発行の「社会学雑誌」は油井教授、藤井教授の退官記念特集であるが、この中にも当時の先生方の名前がよく出てくるが、今は全員が鬼籍に入られており、改めて、時の経過を思い起こされずにはいられない。

進級当初はそうでもなかったが、3年生の4月頃からなんとなく学内がさわがしくなっていた。ベトナム戦争反対のうねりの中で、70年安保条約改定問題など、社会の中における大学の役割、学生のあるべき姿は等が問われており、大学を取り巻く環境は大きく変わろうとしていたのだと思う。そして、68年東京大、69年京都大と大学紛争が西に向かってきていて、神戸大学も例外ではなく、文学部の授業でもゼミとか卒論の指導は殆どなくなっていた(東大紛争では1969年入試中止 京大紛争1969年1月～)。

当時の私は純然たるノンポリであったが、学内は騒然とした雰囲気包まれており、学部集会はいつも共産系と非共産系の学生のどなりあいの様相であった。そして、ついに3年生最後の69年2月から4年生の11月まで学部封鎖に到ってしまった。

そして、時期はよく覚えていないが、住宅開発途上の須磨区高倉台造成地で全学集会が開催され、「高倉台砂漠の対決」と新聞見出しにもなっていた。機動隊に囲まれながら始まった大学側の説明も、途中で全共闘が押し寄せてきて中途半端になってしまったのである(1969年7月12日と確認)。

この学部封鎖の間、長谷川先生が神戸モダン寺でゼミ授業のように社会学科生を集めて学内状況の説明や学生の近況報告の機会を設けてくれていた。こ

れが唯一の情報源であり、先生には未だに感謝の念を持ち続けている。

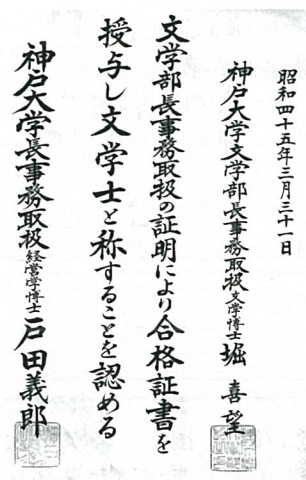
その年の時期は定かではないが(9月末か10月)、長谷川先生達と学部の封鎖解除に赴いた。いざ教室に入ると室内には物干しと卓球台がぼつんとあるだけで、まるでままごとの跡のようであった。この様子を見たとき、この9ヶ月間はいったい何だっただろうと情けなさともなしさを覚えた記憶がある(この間、日本育英会の奨学金も停止され、貧乏学生にとっては苦難の時期でもあった)。

授業再開後は、形式的に5時限までの時間割が示されたが、実際に5時限目の授業もなく学内には言いがかりのない虚無感だけが漂っていた。個人的にはなんとか卒論も仕上げて卒業できたが、今でも実質的に大学は3年間で卒業してしまったと公言している。

このような状況下では69年、70年と卒業式もなく、卒業証書は郵送されてきたのであるが、学位記の発出者名は、文学部長事務取扱、大学長事務取扱である。おそらく、このことは私の年だけのことでなかろうかと思う。先般、久しぶりに卒業証書を取り出してみると、大学長事務取扱から卒業生宛の激励と大学改革への決意表明の手紙が入っていた。この手紙のことは、全く記憶になかったが、50年も経っているのに印字が薄れていることに時の流れを感じずにはいられない。

(追記)

うれしいことに、2019年3月にホストファミリーとして世話をしている韓国人女子留学生の親族として卒業式に参加することができ、50年ぶりにその雰囲気味わうことができた。



国文学読書室と読書室ノート

鈴木 義和 (28回生・国文学専攻・1980年卒)

私が文学部に在籍していた当時、文学部本館2階の北側に国文学専攻の読書室があった。当時は本館の2階、3階、4階にそれぞれ文学科、史学科、哲学科の合同研究室があり、読書室とは、その合同研究室で借りた本を読むための場所なのだと聞いていた。国文学の読書室は教員研究室2つ分の広さがあり、その中央を本棚で区切って左右2つの部分に分けていた。読書室は、ただ静かに本を読むためだけでなく、授業の合間の休憩やだべりの場所であり、昼食やお茶の場でもあった。当時の国文の学生の多くは、大学に行くときまず読書室に入り、授業が終わればまた読書室に戻ることを繰り返して、この部屋に人がいないということはほとんどなかったように思う。夏休み期間中でもほぼ毎日何人かは来ていたと記憶している。

読書室には独室ノートと題するノートが置かれていた。たまたま読書室に一人になった時など、昨日見た夢の話や新しく見つけた古本屋の情報、ときにはポエムっぽいものが書かれることもあった。何せその頃は、国文学でコンパを年に5、6回、遊園地やお花見、古本屋巡りなどのアクティビティも数えきれなくらいやっていたので、そういう行事の記録もたくさん読書室ノートに書かれることになった。

この読書室ノートの1978年～85年ごろのものが今でも20数冊残されている。その記事の中からいくつかを取り上げて当時の学生生活の様子を少しく紹介することにしたい。

まず、私にとって印象に残っているのは、ソフトボールで国文学・中国文学・英米文学合同の学生チームが、文学部の三木教授率いるドイツ語教官チームを打ち負かした試合の記録である。当時、昼休みには毎日のように文学部の北の道路で三角ベースのソフトボールをやっていた。ロータリーの西側がホームベースで、電話ボックスが1塁、ロータリーの本が2塁、そして理学部の階段のところを超えればホームランだった。道路でソフトボールなど今では考えられないが、その頃はまだ車が少なかったのだ。また、文理農キャンパスの入り口の東、今は自然科学総合研究棟が建っている所が空き地で、本格的に試合をするときはそこを使っていた。(許可を取る必要などはなかった。) そのようにして鍛錬を重ねた文学部生チームが、無敵を誇った(らしい)ドイツ語教官チームと対戦し、14対11で撃破したのである。この試合の記事は、

1979年の読書室ノートに5ページに亘って詳細に記録されている。ちなみに私は7番バッターで3打数2安打を記録している。ソフトボールのことはこれ以外にもたくさん書かれており、試合の結果、年間の個人成績などが記録されている。

次に紹介したいのが、1978～80年度の国文学での泊りがけの旅行の記録である。読書室ノートにまとめられていた記事によると、①1978年7月三田の関西学生セミナーハウスで行った読書会で参加者は教官1人を含めて22人、②1979年2月の香住カニすきツアーに教官1人を含む12人が参加、③1979年8月の香住海水浴が参加者15人、④1980年3月に愛知県の伊良湖に行った28回生の卒業旅行では教官1人を含めて参加者19人、⑤同じく1980年3月の福井県三方のカニすきツアーに24人が参加、⑥1980年8月に兵庫県鉢伏高原にあった廃校での林間学校みたいのに参加者20人、⑦1980年12月の木曽路文学旅行に教官1人を含む8人が参加、⑧1981年3月に道後温泉に行った29回生の卒業旅行の参加者は14人だった。3年間で8回の泊りがけの旅行に行ったという回数もさることながら、国文学の学生数が学年平均20人弱だったことを考えれば、参加者の多さにも驚かされる。先生方がよく付き合ってくださったこともとてもうれしいことだった。

このように国文学の学生は集まって大いに遊んだのだが、もちろん遊んでばかりいたわけではない。読書室ノートには毎年大学院入試が終わるとその年の受験者によって国文の入試問題が書かれていた(当時は過去問の閲覧サービスがなかった)し、大学院入試の英語の勉強を読書室でしていたりもした。しかし、読書室での勉強と言えば研究会であった。2つに区切られた読書室でふだんみんながいるのは東側の半分であり、西側の半分は研究会用のスペースとされていた。1983年8月の読書室ノートにその時に行われていた研究会の一覧が載っている。①源氏物語研究会(3)、②平安文学読書会(4)、③和歌文学研究会神和会(4)、④御伽草子読書会(4)、⑤仏教説話研究会(3)、⑥江学研究会(4)、⑦近現代読書会(6)、⑧石川淳先生読書会(5)、⑨内田百閒茶話会百鬼会(3)、⑩泉鏡花研究会(2)(カッコ内はメンバー数)。この全部が継続的にアクティブな活動を行ってはいなかったと思うが、それにしても多くの研究会が活動していた。大学院生や学部学生が主導して自主的に開催するこのような研究会の存在は、国文学専攻の勢いを感じさせるものであった。

神戸大学の思い出

四方 俊祐 (44回生・西洋史学専攻・1996年卒)

1. 学部生時代

私が神戸大学文学部に入学できたのは、1992年であった。この92年次は、「教養課程」の存在した最後の学年だった。この「教養課程」とは3年次に「専門課程」に上がる前に幅広い教養を涵養する目的だったが、恥ずかしながら、学生身分でそのような趣旨を理解するはずもなかった。1年次に授業を詰めて単位取得した後、実質的に2年次前期は語学の授業以外ほとんど履修しなくてもよいという自由を無駄遣いしていた。結果として、フランス語の単位を落とし、3年次に再履修しなければならなかった。

3年次専門課程では史学科を志望し、西洋史学の所属となった。西洋史学教員は栗原優先生と鈴木利彰先生という個性の強い二人だったが、共通することは、文献講読で英語論文を読む際に、非常に正確さ、厳密さを求めてきたことであった。栗原先生の授業ではハンス・カーン『アメリカン・ナショナリズム』を、鈴木先生の文献講読では歴史哲学関係の論文を輪読したのを覚えている。英語の辞書を繰り返し引き、夜中までかかって予習したことは今となつては懐かしい。

やはり、大学時代の思い出で避けることができないのは、1995年の阪神・淡路大震災であろう。折しもその震災当日は、再履修したフランス語の試験日であり、当日朝4時か5時ころまで教科書を復習して、就寝後直ぐの夢うつつの時に激震にたたき起こされた。下宿先が、JR神戸線住吉駅のすぐ南側であり、震度7超の揺れを経験した。体験したと言っても、どのように表現していいのかわからない。当時の震度5や震度6の揺れを体験した人の方が、「地震だ」と理解して恐怖したのではないかと思う。記憶にある揺れはドーンという衝撃とともに縦揺れがあったように思われるが、その後はぐちゃぐちゃな状態で覚えていない。揺れが収まるとすぐに電話が鳴った。大阪の実家に住む母からだった。私の安否を確認するために揺れの中電話口まで飛んで行ったのだろうか。母は強し。その後電話は一切使えなくなった。

太陽が昇り、周辺が明るくなると周辺の状況が見えるようになり、愕然とした。私が住んでいた鉄筋マンション周辺の民家が崩れ、近所の人々が中に生存者がいるか確認し始めていた。すぐ近くで下宿する友人がどうなっているのか心配になった。文化住宅1階の友人の部屋が、地震によって1階部分が完全に

崩れ埋まっているのを目撃した途端に足が震えだし、それ以上前に進むことができなかった。近所の人々によって救い出された友人を見た時、泣いてお互いの無事を心から喜んだ。

自分の下宿先は食器やオーディオ機器や図書などが散乱し、ライフラインも寸断されていたため、軽音楽部の友人たちと、被害の少なかった友人宅を数日転々としていた。それらの友人たちが、次第に親元に戻っていったこともあり、私も大阪の親元に戻った。しかし、自分の部屋があるわけでもなく、1週間もすれば落ち着かなくなり、ボランティアに行くと言って神戸に戻ってきた。小学校などでボランティア活動に参加したとはいっても、実際には配られるコンビニ弁当やパンなど目当てであったので、「ボランティア元年」と言われ、全国から学生がボランティア活動に集まったと新聞やテレビで称えるような報道が流れると、正直言えば無性に気持ちが悪かった。

4月に大学での授業が再開され、幸い文学部関係の学生、教員、職員などには死者が出なかったと聞いた。友人や先生方と顔を合わせたときに耳にした誰かの言葉が忘れられない。「文学部の人間はしぶといなあ。」

2. 大学院時代(修士課程)

現在神戸大学文学部大学院は人文学研究科に統一されているが、私の大学院時代は文学研究科(修士課程)と文化学研究科(博士後期課程)に分かれていた。文学研究科に進んだ1996年当時は、大学院生が少なく、あてがわれている部屋も大部屋に修士課程院生が集められていたため、専門領域を超えてよく会話したものだった。よく集まっていたのは哲学、美術(史)学、史学系(日東西)、地理学などの先輩後輩であった。

大学院時代の思い出を一つ取り上げるとすれば、文学部での花見(と称する宴会)を思い出す。現在百年記念館がある場所は、私の修士字時代にはまだ桜並木の見晴らしの良い台地であった。友人が用意したウィスキーをもって、その場所で花見と称してちびちびと飲んでいた。すると、帰る途中の文学部の友人や先生たちが一人、また一人と参加し始めた。

気が付けば、20名を超えていたと思う。先生が自分の研究分野の興味深い話をしたり、院生たちが悩み相談をしたりとにぎやかになっていた。今ではこのような光景はあり得ないだろうが、当時はそれがまだ許されていた時代であった。

大学院文学研究科の揺籃期

竹内 隆夫 (5回生・修士・1974年修了)

私は1972年に5回生として社会学専攻に入学しました。文学研究科はそれまでに3回修了者が出ていたのですが、社会学専攻では、1回生・3回生に各1名の2人しか修了していません。その間に入学者がいなかったのではなく、4回生にも1人在学していました(高校教員に採用され、中退)。2回生は不明ですが、各年次1人しか合格していなかったようです。文学研究科の定員が学部100人の半分50人もあったにもかかわらず、当時の大学院進学率は文科省の資料では1965年以降80年代半ばまで5%前後しかなく(ちなみに'72年は4.6%、大学進学率は21.6%)、定員を満たすことは容易ではなかったと思われますが、しいて満たさねばという動きもなかったかも知れません。また、当時博士課程まで設置されていたのは国立大では旧帝大系といくつかの大学のみで(神戸大学では六甲台3学部)、修士課程の設置も限られていました。

5回生は合格者が3人と、初めて複数になりました。従来の1人ではなく複数入れてみようという判断のようでした。しかし、6回生はまた1人でしたので、5回生の出来が判断を元に戻したのかもしれませんが、修了要件の30単位を満たす授業を1人で受講するのはさぞかし大変だろうと思います。試験後の面接で、堀、杉之原、金沢、長谷川先生方の「冷たい」眼差しを受けての試問は、ほぼ半世紀近い今も記憶の底にこびりついています。

なぜ大学院へ進学したのかというと、学問への高邁な憧れがあったからということではなく、大学紛争を経てなんとなく勉強をし切れていないという思いがあり、もう少し学びたいからというのが、私の場合の志望動機でした。外部から受験しましたので、神戸大の実情を知らなかったのですが、学部で友人がいて、彼から社会学専攻には「経験社会学」コースがあると聞いたからです。「理論社会学」コースのみでは受けていたかはわかりません。つまり、お堅いコースを避けてという程度の志望動機でした。

入学後、とても幸運だったのは、他大学や他専攻でも学ぶ機会を得たことです。長谷川先生から農村をやりませんかと問われ、とくに何とも決めていなかったのですが、はいと答えました。神戸大では学べませんので、関学大社会学部の余田先生のゼミに通いました。また、近世資料を扱うので、日本史の高尾先生の授業でくずし字も学びました。その年、科研費の研究(関学大)で、綾部市の和紙を作る地区の同族調

査をする機会をえて、長谷川先生は和紙を担当されていたため、越前や美濃の和紙を学びに行くこともできました(30年ほど後韓国の農村を調べた折、韓紙を作る工場があったので見学しましたが、工程は一緒でした。中国→朝鮮半島→日本の流れを実感しました)。翌年は、信州の中山道の宿場町や佐久地方の農村での同族団の調査に行きました。宗門人別帳などの近世資料を読まねばならず、くずし字を学んだことがきました。この後社会学教室は、地域調査を重ねて行きますが、その嚆矢の時に関われたとの思いがします。さらに、この頃は予想だになかったことですが、'79年以降タイでの農村家族調査に随行したとき、日本での調査方法や経験が随分役に立つという実感を持ってました。

他方、修士課程のみの大学院としての問題もあり、関西の同様の大学院の院生との交流も行いましたが、博士課程を増設することは、当時はとても困難という状況でした。また、'72年は学費政策でも大きな動きがあり、私立大学との学費格差が最大(6~7倍)に達していたため、それまでの月・1,000円が3,000円と3倍に値上げされました。以後も値上げされますが、3倍以下です(もともと、以後は月の単価が万単位に上昇し、学費格差も2倍以下に縮小)。このことが契機になったのかは定かではありませんが、院生の学習条件の向上を目指して、学生委員の市川先生(西洋史)と協議を行い、院生のコピーは無料で使用できるようになりました。これは現在も続いているようです。

こう振り返ってみると、なんか八面六臂の活躍をしているかのようなのですが、実態はそうではなく、修士論文構想が2年ではまとめきれず、修了を半年延ばさざるをえませんでした。当時の大学院修了者(文系)は、企業への就職の対象外でした。そのため、同窓会の名簿をみましても、教職関係の仕事に就いておられる方が数多く見受けられます。しかし、論文を優先したので、修了後の身の振り方はまったく考えていませんでした(学部の時は、不合格の場合に備えて、就職先を決めていたのですが)。ただ、自分の前半生を振り返った時、幸運だったなという思いが強くなります(大学院に入学後)。さて来年どうするかとぼんやり考えていた頃、助手に採用されることになりました。この経験を積むことができたことは、その後の大学教員としての心の持ち方に随分余裕を与えてくれたと思います(助手は教えることを免除されていたので、これはあとあと大変でしたか)。

院入学から助手を辞めるまで、わずか4年間でしたが、大変貴重な時間と経験を神戸大学文学部で持つことができました。感謝です。

文学部で学んだ10年の歲月

松村 光庸 (19回生・国史学専攻・1971年卒)
2007年 博士前期課程(社会動態専攻)入学・2009年
同上、修了・博士後期課程入学・2013年 博士後期課程修了 学位取得(文学)

私は、眼下に大阪湾と神戸の街を見渡せるキャンパスで、36年間の教員生活を挟んで、10年に及ぶ充実した学生時代を過ごすことができました。振り返って幸福な我が人生であったと実感しています。

1967年4月、希望に燃えて阪急六甲から続く坂道を登り、鶴甲の教養部に辿り着いた時、大学は紛争勃発の前夜であり、至る所に立て看板があつて、不穏な空気が流れていました。それでも教養部の間は正常に講義がありましたが、その後、二回生後期にバリケード封鎖が始まり、落ち着いて勉学に励む環境は完全に失われました。歴史学を学びたいとの意欲に燃えて入学した私にとって、とても残念なことであり、暫くは図書館で借った本を手当たり次第に読む毎日が続きました。

転機となったのは連続して起こった二つの事件でした。一つは、1969年3月に教養部のバリケード内で発生した封鎖に反対する市民(日本共産党の活動家)への凄惨なリンチ事件、そして、もう一つは、この年の7月、全共闘の諸君が宅地造成中の須磨の高倉台団地での全学集会に乱入し、砂ぼこり舞う殺伐とした会場で、ヘルメットを被り、スクラムを組んで「大学解体」を叫び、戸田義郎さん(学長事務取扱、経営学部教授)ら大学執行部に砂を浴びせて、集会を混乱のうちに終わらせた事件でした。この二つの事件は私に様々なことを考えさせる契機となりました。結局は暴力によっては人の思想や信条は変えられないということであり、言論に基づく粘り強い民主主義の発展こそが社会を変革する原動力になることを学びました。こうして、友人の誘いもあり、細やかではありましたが、文学部の封鎖解除、民主化をめざす運動にも参加しました。今から振り返って、この経験はその後の私の人生の選択に決定的な影響を与えたと言えます。

二回生後期から始まる専門課程は当初より希望していた日本史学を選択しました。当時の日本史の陣容は、荘園史研究のパイオニア的存在であった今井林太郎先生、近世史から近代の兵庫米騒動まで幅広く研究されていた阿部真琴先生、そして、東京を中心に活躍する石母田正さん、永原慶二さんらの鎌倉幕府成立の意義を高く評価する「領主制論」に対して、それを批判し、中世国家を「王朝国家」と捉える、京都を中心とする新しい潮流のメンバーであった高尾一彦先生といった錚々たる顔ぶれでした。今井、阿部、高尾の三先生は何れも既に故人となりましたが、学園紛争の真っ只中にもかかわらず、公私ともに大変お世話になりました。

取り分け、卒論指導を引き受けてくださった高尾先生の思い出は、今も私の心に深く刻まれています。当

時、先生はまだ若く助教授で学生とは最も近い存在でしたが、既に「平安時代の名田経営について」(『日本史研究』)という有名な論文を発表されており、学生の指導にあたっては大変厳しく、ゼミでは「君たちから質問が無ければ私は何も答えない」と発言を促したり、『河内屋可正旧記』という江戸期の豪農の日記を読む演習では予習していない学生を厳しく叱責されたりしました。文学部の封鎖が解除された時、封鎖派の学生の矢面に立って嫌われていたからか、先生の研究室は、特にひどく荒らされ、水浸しで多数の専門書が紛失していたのに強い憤りを覚えたことを記憶しています。今は当時執筆された代表作『近世の庶民文化』(岩波書店)を読み返し、先生の「西鶴論」の透徹した論理の展開と、現在も息づく新鮮さに改めて驚き、感動しているところです。

さて、卒業にあたって、高尾先生は大学院(当時は修士課程のみ)への進学を勧めてくださいましたが、1971年4月、荒廃した大学に絶望した私は、教職に就けば引き続き研究は出来るだろうとの考えもあつて、大阪の高校に就職する道を選びました。当時は「デモシカ先生」という言葉が流行していて、「教師にでも成ろうか」、「教師にしか成れない」という意味で、私も多分にそのような教師でありましたが、過ぎ去ってみれば、現場での教育活動、教職員組合運動、子育てに忙殺されて、あっという間に36年の年月が過ぎ去ってしまいました。それはそれで充実していましたが、40歳代後半に至って定年退職が見えてきた時、嘗て学部時代に十分に研究できなかった不全感が頭をもたげ、また、1990年代に台頭してきた歴史修正主義への危機感もあつて、もう一度、大学で学び直したいとの気持ちが強くなり、定年退職一年前に思い切って職を辞し、改めて大学院に入学して、修士2年、博士4年、合計6年間を、以前とは格段に充実した文学部での研究に没頭することが出来ました。

浦島太郎のようでもあり、息子・娘たちの世代と机を並べての勉学でしたが、先生方の懇切な指導や学生諸君の支えもあつて楽しく学ぶことができ、人生の至福の時を過ごすことが出来ました。博士論文のテーマは「天津日本専管租界の研究」というもので、戦前期の中国・天津にあった日本人の租界についてのマニアックな研究ですが、古希を過ぎた今も、このテーマを深めるべく、投稿論文の執筆に悪戦苦闘する毎日です。それから、研究テーマとの関係からか、外国人留学生との交流も、残された人生の大きな財産となりました。論文の日本語の修正を多数の留学生から頼まれましたが、彼らの多くは既に中国、韓国で大学教員などの職を得て活躍していることも大きな喜びです。最後に、直接にご指導頂いた近代史の奥村弘先生、河島真先生、中世史の高橋昌明先生、市澤哲先生、古代史の古市晃先生の日本史専攻の先生方を始め、他専攻の文学部の諸先生方、及び、同窓の院生、学生の皆さんに感謝申し上げ、この稿を閉じたいと思います。

蔵書の思い出

池上 洵一名誉教授(国文学)

私が文学部の教官として在籍したのは1974年から2000年の春まで。その前には文学部の8回生として1956年から60年の春まで在学しましたから、学生としても、教官としても、思い出は一杯詰まっています。

学生時代、私は1年半の教養課程を姫路分校(旧制姫路高校)、専門課程は阪神御影駅前の御影分校で過ごし、六甲台とは無縁の生活でした。いま我々がいる文理農キャンパスは当時は米軍の将校宿舎で、キャンパスの周囲は頑丈な鉄条網で囲まれ、「KEEP OFF」の大きな看板が付いていて、とても近づける状態ではなかった。だから、教官として戻ってきた時、そんな場所に文学部が独自の建物を持っていることには感動の他なかった。

御影分校は、姫路師範と合併して兵庫師範となり、住吉山手に移って行った御影師範の跡地を、神戸経済大の予科が使っていたものですが、空襲で予科の建物は木端微塵、蔵書も全部灰になってしまったから、戦後やっと建った校舎の蔵書は、戦後の予算で買ったものだけ。気の毒なほど本の無い大学だったので、私も卒論を書く時には、恩師永積安明先生のお宅にあった先生の蔵書を何冊も借りて書かせてもらいました。

とにかく、わが文学部が六甲台に独自の校舎を持てたのは嬉しかったし、図書館を見ると蔵書もだいぶ増えてはいたのですが、専攻と直接には重ならない隣接分野、仏教史学とか民俗学などは、基本文献もまだまだ足りなかった。その頃は大学院も修士課程はすでに出来ていたから、学生も仏教でいえば超基本文献である「大正新修大蔵經」などをを使わざるを得ない。しかしそれは旧制姫路高校から教養部(いまの国際人間科学部)の図書館に移されているものしかなかったから、一々借りに行かねばならぬ。しかも分厚くて古い革装の本だから、うっかり持つと衣服や腕に赤茶色の粉が付いてしまう。一冊だけでも重いそんな本を持ち運ぶだけでも大変そうな学生の姿を見て、なんとか文学部にも備えてやりたいと思うが、私が使えるわずかな予算ではどうにもならない。

そんな時、ある会議の後で、倫理学の橋本峰雄先生が廊下を歩きながら「今年は哲学科でまとめて使える予算があるのだが、何を買うかなあ」と呟かれるのを聞いて、私はその時先生の斜め後を歩いていたのだが、思わず「大正新修大蔵經はどうでしょう」と言ってしまった。先生は何も言わず、そのまま自分の研

究室へと去って行かれたが、その言葉が縁になったのか、その「大蔵經」全86巻を本当に買って下さった。図書館の書庫にでんと収まったそれを見て、私は感動しましたが、それには全31巻の「索引」も出版されているのだが、それは私が自分で揃えるしかない。しかし予算はない。

そこで思いついたのが、その写真複製というか海賊版というか、かなり怪しげではあるが中身は同じ本が台湾で出版されていること。「よしあれを買おう」と決断して注文すると、図書館の係の人が「先生、これは本物ではありませんよ」と言う。私も「それはわかっているんだけど、予算がないんで仕方がないんだよ」なんてやり取りがあつた末に買ってもらったのが、いまでも図書館にあるはずの「大蔵經索引」です。本物の「大蔵經」の隣に貧相な装丁の「索引」が並んでいるのは、そういう次第なのです。

それから何年か後、私は、どういう経緯か知りませんが、文部省の学術審議会委員という役に任命されたことがありました。これは要するに科学研究費の第一次審査をする役で、最終決定するのは第二次審査とか、もっと上の人の役だったのですが、全国から提出されている大量の申請書を、私は一切のエコヒイキなく、大真面目に審査したつもりですが、たくさん事例を見ているうちに、どうやったら審査員の眼によく映るかを何となく教えられた気がしました。

そこで、委員の役目を解かれた後に、今度は出願者としてそれを実行してみたのです。すると、私の科研費や出版助成金の獲得率が飛躍的に向上しました。それでどんどん本が買えるようになった。いま図書館にある「国訳一切經」「日本大蔵經」「大日本仏教全書」「南伝大蔵經」などの基本図書が揃っていたのは、その成果でした。

すべては遠い昔になりましたが、私が文学部のお役に立てた部分があつたとすれば、こんな点だったかなあと、今はぼんやり考えているばかりです。



池上先生の研究室で、左は萩 紀男さん（8回生・国文学専攻）

文学部創立70周年によせて

眞方 忠道 名誉教授 (哲学)

〔以下の拙文では、文学部の為に心血を注いでご苦労下さった懐かしい先輩の先生方、同僚及び同窓会の方々のお名前をほぼ割愛させていただきます。〕

私が神戸大学に秋田大学から転任してきたのは、1969 (昭和44) 年の4月でした。いわゆる70年安保闘争、大学紛争の最中です。実は私の学生時代は、樺美智子さんが機動隊との衝突で亡くなった60年安保の時代です。というわけでほぼこの十年間、特に学生諸君が、政治・外交に関心を持ち、資本主義打倒を夢み (ソ連、中国は理想実現の国と信じられていました)、次第に過激になって行くのを目撃したことになります。私はといえば、組織の上部から言われたことをマイクで繰り返す学生運動家のアジ演説が苦手で逃げ回っていました。(ちなみに加藤尚武、野口武彦氏達は、ほぼ同期で、都学連の委員などで活躍していました。)

神戸大学に來た時、文学部は机や椅子のバリケードが築かれ、教官、事務員は完全にシャットアウト、事務は今の神戸駅近くの教会の隣のペンシルビルの四階で執務、教授会は学生諸君の妨害を警戒して秘密裡に転々と市内を移動、という有様でした。教授会は、全共闘の学生に理解・同調を示すハト派三分の一、学生が本分を忘れて欲求不満をぶつけているに過ぎず、機動隊の力を借りてでも正常化すべしとするタカ派三分の一、どっちともいえない、穏便に何とかならないかと沈黙をまもるグループ (日和見と呼ばれた) 三分の一に割れていました。学部長、評議員、学生委員、教務委員の先生方は、大変な苦勞をされておられましたが、一番若輩の私は、タカ派の立場を主張、一年先輩の野口氏が弁舌さわやかに反対



演説をぶつという有様。先輩の先生方は面白がって眺めてられたのでは、と今になって汗顔の至りではあります。

それはさておき、東大の安田講堂攻防の前後に、神戸大学も機動隊に護られて全学集会を開き、授業再開にこぎつけました。ここで思い出すのは、その頃学生諸君が、大学の先生は専門バカで、自分の専門以外に無関心で無知、社会の実情、労働者の苦しみを知らず、結局資本家の手先になっている、という非難です。これに対し、なんとか開催にこぎつけた学生と教官の対話集会で、芭蕉の「予が風雅は夏炉冬扇の如し」という言葉を紹介し、夏の火鉢、冬の扇子のように役にたたぬように見えながら、人間に欠かせぬ心を豊かにするものを追求する文学部の性格を説かれた国文の永積先生 (どちらかといえばハト派) の姿が印象に残っています。学生諸君はあざ笑いましたが、年が経つにつれてジワジワと効いてきたことと思います。

学内が静かになるに従い、文学部特有の「温故知新」の精神に根差す教育が復活してきました。そして、紛争の始まる前年1968 (昭和43) 年に設置された文学研究科 (修士課程) の修了者が続々と出てきます。そうすると高度専門研究の継続、高度専門職への就職の希望に応える博士課程設置の要望が高まってきました。それまで、法科、経済、経営、医学部だけに設置されていた博士課程を、文理農工の各学部にも設置することについては学内に反発もありましたが、1975 (昭和50) 年に学長に選ばれた須田勇先生が、神戸大学としては当然の要求と判断され、当該学部、各学科が足並みをそろえて文部省と交渉、1978 (昭和53) 年に博士課程設置が内定しました。但し旧制に無い新しい博士課程を作るということで、文部省の強力な指導により、文学部を母体に教育、教養の一部教官が参加する独立研究科——文化科学研究科が同年に発足。1980 (昭和55) 年に理工農を母体に、教育、教養の一部教官が参加する自然科学研究が発足しました。(1978 年7月から20ヶ月、私はイギリ

スのケンブリッジに文部省の在外研究に行かせて頂いたため、この間の先生方のご苦勞については空白です。申し訳ありません。)

さて、新独立研究科は、学科の枠をはずして副指導教官に他分野の教官が加わり、専門分野にとらわれない広い視野に立つ研究教育を目指す体制というのが目玉でした。学位も学術博士 (外国の Ph.D. を念頭に置く) で、何年か実績を積んでからでなければ、文学博士の学位を出す事は出来ないというハンディキャップはありましたが、伝統的な文学部固有の研究教育は守られました。同時に、他分野の学生の研究指導、論文審査に参加することにより興味深い成果を挙げる事が出来たのも確かです。

一方、1991 (平成3) 年頃から、特に大学、大学院改革が要求されることになり、文部省は神戸大学に対し、文学部、発達科学部 (1992 [平成4] 年教育学部改組により発足)、国際文化学部 (同年教養部改組により発足) を一体化した新しい博士課程設置を提案してきました。この構想によれば学部学科の講座制を解体し、種々の研究領域をいろいろ組み合わせ、新しい研究分野を創設するというものでした。(どの研究分野同士が結び付くかは自由で兎に角新しい研究分野を構想せよ、といわれても、ガラポン方式によるほか無いと皮肉られました。) 文学部としては、各専攻分野それぞれに固有の伝統的なディシプリン (訓練、学習方法) が不可欠なのに、機械的に他専攻とシャッフルされては文学部の研究教育は成り立たないとの理由で、文部省と大学執行部に抵抗します。結局1995 (平成7) 年学長に選ばれた西塚泰美先生 (毎年ノーベル賞候補にノミネートされていた) のご尽力により、発達と国際で総合人間科学研究科を、文化科学研究科は文学部の修士課程に直結した博士課程を構想することになりました。この後少々紆余曲折を経て、現在の文学部・大学院人文学研究科 (博士前期・博士後期課程) 体制ができあがりました。

以上文学部と大学院の変遷の流れを紹介しましたが、文学部は旧態依然たる古くさい教育研究体制に

しがみついていると非難されそうです。しかし、各専門、各専攻分野で、それぞれ必要な言語を習得し、正確、厳密、公正に文献講読、あるいは実証的な調査、あるいは実験を積み重ねてはじめて、新しい知見、研究成果を発信するのが、文学部の生命線であり、文学部教育の要であります。これだけは譲れないというところで、先輩、同輩、後輩の方々が、頑張ってくださいのだと思います。

ところで、役立たずとからかわれる文学部に、芭蕉が夏炉冬扇にたとえた風雅の道に相当するものがあるのでしょうか。私の個人的なホラを吹かせていただきますと、それは、文学部に学ぶものが、自分にとって大事なものを、自分の目で見、自分の頭で考え、自分の言葉で語れることを身に付ける道にあるのではないかと考えております。

直接関係が無いように思われるかもしれませんが、ここで山川菊枝の言葉を紹介したいと思います。彼女は太平洋戦争以前から戦中も揺らぐことなく (夫山川均は何度か牢獄に入れられました) 女性解放運動と取り組み、戦後労働省の婦人青年局長を務めました。彼女はその著『二十世紀を歩む——女の足あと』の中で、つぎのように述べています。

「平和な時代に戦争反対とか弾圧反対を叫んでも、いざ圧迫の時代になると、いろいろな口実を設けて、圧迫に追従してしまいがちです。」

耳に痛い言葉ですが、文学部で学んだ人は、少なくともこうした行動だけはとらない力を身につけることになる信じて、私の思い出話を終わります。



在りし日の池上淑子文窓会会長 (2009 ~ 2014 : 社会学 16 回生) とパーティ会場にて

2019年の文学部ホームカミングデイ ~文学部70周年を語る~



市澤先生



永田さん



西田さん



鈴木さん

スピーチスナップ 今回、ご寄稿いただいた卒業生と先生方です。



四方さん



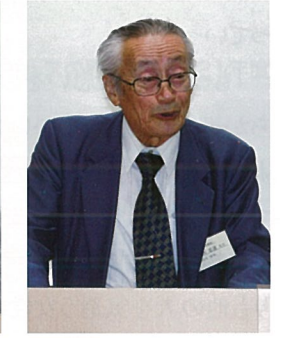
竹内さん



松村さん



池上先生



眞方先生

「当事者」の声から

赤羽 佳奈子（2017 年度卒国文学専修）

勤務先：信濃毎日新聞株式会社

ふとした拍子に「あれ、この間までどうやって過ごしていたのだろう」と思う。新型コロナウイルスが世界を騒がせ初めて数カ月。物理的にも心理的にも透明な「膜」があちこちにできた生活に、いつの間にか慣れつつある。だが、ビニールのシートや距離の「膜」が邪魔で、たった一言さえ伝わりにくいことにもどかしさを覚えることも多い。そんな時は、言葉のやりとりが幾分気楽だった以前に思いを馳せるののだが、もはやないものねだりなのかもしれないと思うと少し寂しくなる。

長野県で新聞記者になり、4月で3年目に入った。2019年10月、台風19号の被害は皆さんも記憶に新しいことと思う。長野県でも、千曲川や支流の氾濫によって多くの被害があった。私が住んでいた上田市でも住宅の被害があちこちで発生し、道路や鉄橋の崩落などで交通障害も多く残った。市内の千曲川の堤防はあともわずかというところで持ち堪えたが、長野市で決壊。その後の被害はご存知の方も多いだろう。

記者になって体験する初めての災害だった。当夜から全体の状況がよく分からないままに何かしなければと話を聞き、カメラを向けた。しかし、上田市では13日以降も避難所に残る人はわずかで、完全とはいかないまでも、地域住民の「生活」が日常に戻っていくのは思いのほか早かった。交通障害はすぐには元通りにならなかったが、観光業の前向きな取り組みも始まり、ボランティアは徐々に市外での活動を中心にしていた。

どうしても被害が大きい地域の報道が多くなることを、ある程度仕方がないことだと思っていた。「決壊した地域はもっと大変だから」と比べる思いが自分の中にあった。だが、取材を進めるうちにその思いは変わっていった。

「もっと大変な思いをしている人もいるのに、自分たちが被災者と言っているのかな」。土石流に家が流されてしまった女性の言葉だ。決壊した地域や避難所で生活する人のことを思い、周囲の支援を申し訳なく思う複雑な胸の内を話してくださった。自分の状況よりも他の人を気遣う女性の言葉に、被害に遭った「当事者」がいる限り、全体の被害の大小は関係なく、当



事者一人一人の声を聞かなければと思った。寸断された鉄道や道路の影響を受けながら通学する高校生たち、毎日被災地に出向いてボランティアをする地元の大学生たち、「元気を伝えたい」と前向きに活動する旅館の主人たち…。取材したものがすべて記事になったわけではないが、さまざまな状況にいる「当事者」の声に耳を傾けることで、伝えることの意義を改めて学んだ気がする。

今年の4月、2年間務めた上田支社を離れ、諏訪湖の近くにある支社に異動した。今は八ヶ岳山麓の村と町を担当し、晴れた日には八ヶ岳と富士山を望む絶景の中で仕事をしている。自然豊かな長野県でも新型コロナの影響は大きく、目に見えない日常の脆さに不思議な感覚になった。

もともと家にいることが大好きで、休日には家の鍵を開けずに生活することが多いのだが、「不要不急の外出は控えて」と制限されると急に外出したくなる。観光業や飲食業だけでなく、さまざまな業種が影響を受けていることを知り、「不要不急」の外出が世の中を作っているのだなあと感じた。他の人から見たら不要不急でも、当事者にとっては必要なこともある。文学や芸術も不要不急かもしれないが、心が落ち着かないときや、逆に刺激が不足しているとき、気を紛らわせてくれる存在としては重要だと思いたい。他人の行動の不要不急にまで口を出すことが当たり前になるのは怖い。新型コロナにかかわらず、さまざまな場面で「当事者にとって何が必要か」という視点を忘れないようにしたい。

穏やかとは言い難い状況の中でも、お年寄りが並んで農作業に汗を流す姿や、子どもたちが色とりどりのマスクで元気に通学する姿を目にすると、思わず頬が緩む。苦境に立たされている人、声を上げられずにいる人の声を拾うことはもちろん、感染対策が当たり前になった生活の中で、いかに日常を充実させるか工夫する人たちの前向きな姿も捉えていきたい。

文窓会（文学部同窓会）—— 会計報告 ——

令和元年度収支計算書（平成31年4月1日～令和2年3月31日）

【収入の部】前年度繰越金	¥21,592,436
今年度収入合計	¥3,979,998
会費納入金	(3,400,000)
協力金	(530,000)
行事受取会費	(48,000)
受取利息	(1,998)
収入合計	¥25,572,434
【支出の部】事業活動費	¥3,003,332
会報費	(1,737,540)
歓送迎会費用	(417,640)
総会費	(400,000)
文窓賞費	(375,102)
ホームページ管理費	(8,250)
名簿管理費	(64,800)
協力金費	¥1,330,000
学術助成費	(1,150,000)
学友会費	(110,000)
活動援助費	(50,000)
学祭援助費	(20,000)
渉外費	¥153,160
事務局費	¥1,001,846
事務業務委託報酬	(600,000)
家賃	(91,560)
通信費	(99,884)
消耗品費	(25,032)
消耗什器備品	(185,370)
支払手数料	¥44,449
旅費交通費	¥154,790
会議費	¥80,600
租税公課	¥231
支払利息	¥2
今年度支出合計	¥5,768,410
次年度繰越金	¥19,804,024
支出合計	¥25,572,434
(今年度収支)	(▲¥1,788,410)

文窓会役員（令和元年9月末現在）

会長 武藤 美也子（43年卒・国文学）

<その他の役員>

日高 健一（36年卒・芸術学） 花木 直彦（36年卒・国史学） 三宅 征彦（41年卒・社会学） 田中 賢司（42年卒・社会学）

廣野 幸夫（43年卒・社会学） 吉田 浩次（43年卒・社会学） 西川 京子（44年卒・西洋史学） 田中 睦子（46年卒・芸術学）

坂本 直樹（59年卒・社会学） 津田 薫（平22年卒・フランス文学） 中畑 寛之（平13年院修了・フランス文学）

今年の「新型コロナウイルス感染症」は大学及び在学生に多大の影響を与えました。特に文学部は所帯が小さく、後期からの対面授業等の準備に大変な状況のため、文窓会として以下の寄付を行い支援しました。

●文学部への助成金（コロナ緊急支援金） 50万円

●大学の新型コロナウイルス感染症対策緊急募金 30万円

（大学の緊急募金には文窓会個人会員からもご寄付をいただいています）

東京支部だより

2020年度の文窓会東京支部総会および文窓会主催の木曜会を下記にて開催予定でしたが、コロナウイルスの影響で、2021年度に順延致したく、お知らせ致します。

2020年度の文窓会東京支部の総会を下記にて開催予定です。

併せて、神戸大学教授の宮下規久朗先生に（文窓会主催の）木曜会での講演をお願いしています。

（講演内容は別途お知らせ致します）万障お繰り合わせの上、ご参加下さい。

開催日時：2020年10月8日（木）12時から16時30分まで

総会：12時から13時30分（昼食付） / 木曜会：14時より16時30分まで

場 所：神戸大学東京六甲クラブ（千代田区丸の内3丁目1番1号 帝劇ビル地下2階

地下鉄日比谷駅・有楽町駅B3出口すぐ、JR有楽町駅西側5分）

TEL 03-3211-2916 FAX 03-3211-3147 e-mail tokyo@rokko-club.jp

令和元年度財産目録（令和2年3月31日現在）

I. 資産の部	¥19,804,024
(池田泉州銀行) 普通預金	(111)
(みなと銀行) 普通預金	(4,636)
現 金	(319,124)
(ゆうちょ銀行) 普通貯金	(2,776,330)
(みなと銀行) 定期預金	(1,007,057)
(みなと銀行) 定期預金	(1,510,051)
(ゆうちょ銀行) 振替口座	(119,442)
(ゆうちょ銀行) 定期貯金	(6,001,395)
(みなと銀行) 定期預金	(8,065,878)
II. 負債の部	¥0
III. 正味財産合計	¥19,804,024

【特記事項】今年度支出の内、約130万円が文学部創部70周年記念事業に関連した特別支出です。内訳は「70周年記念特別支出計算書」を参照してください。

70周年記念特別支出計算書			
70周年記念関連項目	今年度支出	昨年度支出実績	70周年記念特別支出
対文学部学術助成	1,000,000	400,000	600,000
文窓賞70周年記念特別賞	30,000	-	30,000
会報（70周年記念号）作成費	876,960	595,080	281,880
会報（70周年記念号）編集費	220,000	86,400	133,600
行事撮影用カメラ購入	185,370	-	185,370
HCD ケータリング	400,000	320,000	80,000
		特別支出額合計→	¥1,310,850

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

令和2年9月21日

会計監査 花木直彦 印